

せたかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第七十号(毎月一日発行)
平成七年七月一日

北海の古平風土物語 三六

信仰を集めた 山の神さま
いたこ、の福島おき波女さん

高橋 源 五

古平をはじめ美国・積丹、余市と積丹半島一円には、古いころから、いたこ、さんと呼ばれる人たちが数人はいた。つきもの払い・厄払い・神おろし・仏おろしをしたり、海陸での遭難者探しや霊の慰めなどをする時にこの、いたこ、さんに頼るといふ習慣が続いていた。

お盆や正月の休みどきには、家族や親戚、そのほか縁者たちが集まって、いたこの口寄せを聞くことが多くあった。

また病人が出たり、体ぐあいが悪くなったり、なにか心配ごとでも起きるとおみくじをとって、お払いのご祈禱や供養をすることが多かった。

こんなことで、おき婆さんは、いたこ、をずうっと続けて、終戦後もなお健在であった。町の人たちにはよく世話をやき、津軽弁コで、きさくな人柄

の婆さんであったので大変にうけが良かった。津軽地方に生まれ育ち、若いころから、いたこ、をしていたのであった。

おき婆さんを頼る人たちの出入りも多く、山の神さんと呼ばれていた社の前にはいつも赤々とお灯明がともり、訪れる人たちの歓談で賑わっていたことを思い出す。

私も小さいころ、よく母に連れられて行ったことがあるが、供物のだんごや餅、お菓子などを貰ったことがある。

またお盆や正月の休みになると、父(小野寺源太郎)は、おき婆さんに頼んで「おみくじ」や「口寄せ」をしてもらったことがある。

いつもニコニコしていて、よく声をかけてくれる温情深い婆さんであった。昭和三十年過ぎ

ころ、年老いたおき婆さんは亡くなった。婆さんを頼りにしていた人たちは、すっかり淋しくなったと、婆さんが亡くなったことを惜しみ、その死を悼む人

『いたこ』と『口寄せ』
青森県恐山の地蔵講に集まるいたこ、がよく知られているが、霊の世界と人間との間にた

つて、神や仏の霊を招き迎えるようなことをする巫女(みこ)のこと。また、巫女が靈魂を招

難破破船と

津波のつしと

オシヨ口湾を襲った津波で漁をしていたアイヌ五人が水死したが、この時も、その翌日からオシヨ口に住むアイヌが大勢集まって来てメツカ打ちを行ったという

この津波で、ビクニという場所でもアイヌや和人が水死したと聞いたが、詳しくは分からないのではぶく。

この年六月二十六日にも、松前で前代未聞という大暴風雨で松前の港に入っていた船百八十余隻が破損したという。

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

この中には藩のご用船政徳丸もふくまれ、かなりの破損だったという。

この日は曹谷でも夜に入ってから大暴風になり、会所前の浜にあった荷揚げ用の棧橋が壊れてすっかり流されてしまった。松前から大坂に向かっていた船も途中で難破し、その船の帳面一冊と夜着一枚が曹谷場所内の浜に寄った。またシャリという所で、ご用船が大荒れに遭って積み荷を投げ捨てたが、そのうち魚油の入った樽がテシオ場所に流れ着いた。

が多かった。その後、古平には、いたこ、さんという人はいなくなってしまうが、私にとって思い出しに残る人であった。
(古平町栄町に生まれ、旧姓・小野寺。札幌師範学校を卒業して教職につき、退職して現在小樽市に在住、八十三才)

遙かなる故郷の思い出

10

《ドンパチ》

橘 義 春 の話

この話は、私が小学校四、五年生のころだったから、ざっと六十年ぐらいい前になるが、丸山町・新地町、入船町辺りに、世にも不思議な怪奇現象「ドンパチ」というのが起きた。私と同年代か、その前後の方であれば多分記憶されていることと思う。先日、千葉県我孫子市に住んでいる同級生の青木美恵さん（通称かご屋のミエちゃん）に電話をしたついでに聞いた。「覚えてるよ」と元気な声が返ってきた。やはり彼女も忘れてはいなかったのだ。

それは何かというと、夜、一人で暗い道を歩いていると、突然、「ドーン」と地面が大きな音をたてる。「おやッ」と思いながら歩き出すと、また「ドーン」とくる。びっくりして駆け出すと「ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド」と連続した音が家まで追いかけてくるというのである。丸山町に多かつたようだが、誰が言い出したのかみんな「ドンパチ」と言うようになった。そのころの古平は交通も不便

で、陸の孤島と言われ、話題に乏しいところだったのでこの「ドンパチ」のことはあつという間に町中に広がった。それからというもの、夜のひとり歩きをする人はばったりといなくなってしまう。

「ドンパチ」の正体は、「キツネ」だ、いや「ムジナ」だとさまだまだだったが、当時、私の家の隣に住んでいた笠谷正吉さん

〔7月日はこゝんな日〕

水見句十人が開基七十五年記念に高野素十句碑を建立

〔昭和29年〕

ふるさとを同うしたる秋天下 青葉若葉に海水浴のシーズンともなると、観光客の中に穂の詩碑のほか、句碑や歌碑を訪ねる人も多くなります。

文化会館の敷地内にある高野素十の句碑は、その句が有名なことから人気があります。

この句は水見句文さんが、母校である古平小学校七十七周年記念にと特に素十に願ひ詠まれたもので、古平町開基七十五年

（現在は余市町在住）は「カワウソ」だと力説していた。みんなキツネだ、ムジナだと騒いでいるが、丸山町や新地町にはキツネやムジナの棲むような所はない。それに誰もキツネやムジナを見た者がいいではないか。なるほどそのとおりである。そして、新地町から丸山町にかけては川が流れていて、カワウソは水辺に棲むからこの川のごとかにいると言う。なんとなく説得力があるように思えた。

「よしッ、それなら実証してみよう」と思い立った。橋の下辺りが一番怪しいと、まず新地町の斉藤六さんの側の橋から始め

た。首を突っ込んで見たが、水がちよろちよろ流れているだけで、とてもカワウソがいそうもない。下の山形さんの橋の下をのぞいて見たが、ごみが多くあるだけでこれも駄目だ。たけもと屋さんの橋は、橋の手前で川を止めて防火用水に使えるようになっていているが、その下はやはりごみと雑草で穴らしいものもない。イゲタニさんの橋のところも川を止めていて、ここは子供たちの手造りの舟の遊び場。橋の下をのぞいてみてもごみばかりが目立った。

魚も棲んでいない川に、餌も無いのにカワウソはどうやって生きていくのか、そう考えるとカワウソ説もあやしくなった。その後「ドンパチ」も起こらなくなり、あれほど騒がれたのにいつしか忘れ去られて話題にもならなくなってしまった。

遠い昔の故郷に起きたとんだミス터리であったが、いまでも懐かしく思い出させる。

××××××××××××××××

お詫びして訂正します

北海道ジュニアスキー技術選手権大会入賞者のお名前の訂正

誤 田中 晴也 田口 晴也
田中指導員 田口 晴也
田中指導員 田口博久さん

昔の沖村街道：ツリンポ：で

齊藤さん いちごを栽培

竹内コト

昔、小学校（今の文化会館）の下の方に齊藤さんという一家がいて、私の家ととても親しくしていました。

その人たちは春になると、決まって沖村街道から上がったツリンポというところの山畑に行くのです。やがて古平祭りの近くになると、齊藤さんの父さんは天秤棒にいちごを入れたかごを下げて、いちごを売りに下がってきます。また宵宮祭の日には、親しくしている家にはいちごを配って歩くのです。それが毎年いちごを食べる最初の日なのです。

毎年のようにいちごを貰うものですから、ある夏のこと、親の言いつけですぐ上の兄と二人で、魚を届けに山を上がって行ったことがあります。上って行くと、畑一面がいちご畑なのにびっくりしてしまいました。寝泊まりする山小屋が建っていて、そこにはひとどおりの生活用品が揃っていたようです。山から流れてくるきれいな水が引かれていて、回りは雑木林なのでたき木はいくらで

もあり、町から離れてはいるものの、ずいぶんのんびりとした生活だなあ　　と思つたものでした。

山畑への上り口は立岩の近くで、そこには小さい川が流れていて、今は国道ぶちにお墓が建っている所です。山から水が勢いよく流れてくる川を石づたいに上って行くのです。そうすると下からはとても想像できない

古平場所と岡田家

<12>

藩が借金のふみたおし ついに『御用達御免』を願ひ出る

松前藩では当時の大名もそうであったように財政は厳しく、藩と取り引きのある商人（御用達）や請負人らからの献上金や借財でまかなうという状況であった。岡田家は早くから藩御用達をしていたが、代金はとどこおる一方で、ついに、御用達御免の願ひ書を書いた。

「私どもの祖先弥三右衛門のころから長い間ご恩になり、お陰様で代々家業を継いでこられたことは誠にありがたいことでございませう。」

しかし、先代からお買い上げいただきました品物の代金が四千数百両余りになり、たびたびお支払い下さるようお願いいたしました。近年は請負場所の方も不漁

の上、海産物も値下がりをし、支払いにも困っております。先に、藩のご用で宗谷、利尻まで荷物を運びましたがその代金もいただいております、利尻では赤人（ロシヤ人）に船を焼かれなご莫大な損失をいたしました。また箱館（函館）にも立替金として二万両余りあり、ご催促をいたしました。今もそのままだになっております。その後エトモ（室蘭）場所の請負を仰せつけられました。九年間で一万両ほどの損失をだし、城のご修理の際には三千両、そのほか千両余りの献金もいたしております。その上、運上金九百両を前納し、散財が莫大な金額になってしまつて、いま手元にある金でやりくりも難しくなつており、家業を続けていくことも困難になつて参りました。このままでは、大切な御場所の夷人介抱（アイヌ保護の義務）などのほか、いろいろと支障がでるのではないかと心配いたしております。それで、私はこれから五年間は郷土へ引つ込みますので、その間御用達を免じて下さるようお願いを申し上げます。

*安政五年（一八二二）に書いたと思われ、御用達御免願を書き改めましたが、これを差し出した記録はありません。